2016. 03. 15
報告者：桑山　昭

「エチオピア・デシエ市の福祉財団チェシャへの贈呈式報告」

エチオピアへの子ども用車椅子 160 台の贈呈式は、2016 年 2 月 23 日（火）にアジスアベバから北北東に 350 ㎞離れたデシエ市にある「人工装具と矯正器具センター」（the Dessie Prosthetic & Orthotic Centre：POC）で開催された。デシエ市はアジスアベバから車で約 7 時間、高度 2500mの高原にある人口約 25 万人の町である。

贈呈式の会場となった当センターは運動訓練施設（贈呈式会場となった）や補装具等の製作施設、一定期間の宿泊ができる寮（写真左の左手の建物）が併設されている。贈呈式は写真右上の左傾斜の屋根の屋内で行われた。
チェシャ財団の幹部（Mr. Kedir）、デシエ市の幹部、日本大使館の山田一等書記官、障害児とその保護者、総勢３０人程度の出席を得て、贈呈式を開催。
写真左のように会場の外にも車椅子を受け取る子どもとその家族が集まっていた。従って今回のイベントの参加者は 60 名程度と思われる。
写真左上はデシエ市内の様子。

写真左：会場に向かうチェシャ幹部の Mr. Kedir と森田会長、山田一等書記官、他
写真右：会場で集まった人たちを前に挨拶をする森田会長。

チェシャ福祉財団への贈呈式について：
ＣＦ－ＡＩ（Cheshire Foundation Action for Inclusion） がその略称で、今回の贈呈式はそのアジスアベバの本部とデシエオフィスとの連携活動である。デシエオフィスは贈呈式を行うほどの設備は保有していないため、上記センター（Prosthetic & Orthosis Centre）での式開催となっている。

贈呈式の様子

司会：Mr. Alemtsehay Maru
・ＣＦ－ＡＩのプログラムマネージャー（実務に精通している）
・社会主義政権時代にユーゴスラビアに留学し福祉関係の大学を卒業している。福祉関係の学識だけでなく医療の基礎知識も有している。
・今回のイベントの全ての手配等を行い、我々の世話をしてくれた。
・特に、2 月 26 日は土曜日で休日にも関わらず、「チェシャ本部訪問」を希望すると、快く引き受けてくれて「オフィスは、休日で無人だが案内する」といって、彼の息子を連れて本部に加えて市内案内をしてくれた。
・市内案内では、車の駐車が自由にできないので路上に停めるが、我々の市内見学の間はその息子が車で待っていてくれた。
（我々の荷物が盗まれないように見張っていてくれたようである）

チェシャ財団幹部：Mr. Kedir
・エチオピアチェシャ財団の幹部（チェシャ財団は世界中にある）
・チェシャ財団のエチオピア国内での活動の紹介をした。
・今回の車椅子の贈呈式は Bahir Dar, Jimma に続く Dessie の 3 回目で贈られた車椅子は 340 台になることを紹介した。
・今回の贈呈に至るすべての関係者に謝意を述べた。
・車椅子を受け取る家族に対して、車椅子を適正に使用することを要請すると共に子どもの成長で車椅子が合わなくなった場合は財団に返却することを要望していた。
・それは別の子どもに車椅子を使って貰えることであり、そのことが重要であると訴えていた。
・彼はイスラム教徒（エチオピア人の 40%くらいがイスラム教徒らしい）で、デシエ市からアジスアベバへの帰路の途中の昼食時はお祈りの時間らしく、我々と昼食を一緒に取る時間が無かったようである。

会長：森田
・どのようにして我々が車椅子を集めて、整備し送ったかを紹介した。
・今回の車椅子を適切に使用することを切望し、次の使用者に渡るようにお願いをした。
・車椅子を利用して子どもが外にでることが可能になり、地域社会との交流が進み、地域社会の障害児への理解が深まることを希望していると述べた。
・また、大切に使用して欲しい、そして次の子どもにつながるようにしてほしいと、現地の言葉を交えてユーモラスかつ真摯に訴えていた。

ボランティア：桑山

・車椅子を集める作業から、整備、梱包、積み込み出荷までを写真で紹介した。

・「車椅子で笑顔」が当会の精神でありロゴがそれをデザインしていることも紹介した。

・エチオピアだけでなく世界中に車椅子を贈っていること、１人の子どもの使用で終わるのではなく、次の子どもの利用者にもつながるようにしてほしいと要請した。

日本大使館：山田一等書記官

・大使に代わって日本大使館活動、特に障害者関連の活動の内容について紹介した。

・チェシャ財団の活動に感謝すると共に、今後も一緒に活動をすることを約束した。

デシエ市幹部：Mr. Wondante Demissie

・デシエ市の障害者に車椅子を贈ってくれたことにチェシャと我々ＮＰＯに謝意を表した。

・また、日本大使館への感謝をするとともに東京とデシエ市が姉妹都市になることを実現するための協力を求めた。

・最後に車椅子が継続的に使用されることを強く要望した。

写真左の左手の建物で贈呈式が行われ、手前の敷地に個別に子どもに引き渡しが行われる車椅子が準備されていた。写真右は、今回送られた 160 台の車椅子を保管している倉庫。（他にも保管場所あり）

引き渡し式（センターの庭先で子ども１人ずつに引き渡し）

家庭訪問

今回は 5 軒の家庭を訪問。

各家はトタンで仕切られている。突き当りに門がありその奥に自宅がある。

車椅子で外に出ると近所の子どもたちが集まってきて当人も喜ぶとのこと。社会的、地域的支援は無いが近所の人々は温かい。
車椅子に座らせたが、その方法が正しくなくまた指導もなかった様子なので、教えた。また、送られた状態で椅子が正しく締め付けされていなかったので締めるように依頼した。
家族構成は、本人（モハメッド・ジェマール、8 歳男児）、運転手の父親、母親と妹（写真左の女の子）4 人家族。
1,000 ブル／月（およそ 6,000 円）の収入とのこと。家のある場所は大通りから少し奥まった場所で比較的よい環境と言える。

大通りから階段状の通りをあがって通りから外れた路地を入った突き当りに自宅がある。
写真左の洗濯場の右が自宅入口になっている。

子ども：シルバドール・チェキューブ（１才半、男児)。シングルマザー（２３才）の母親とその妹と暮らしている。
離婚した父親から養育費がでているが、借りている家は政府からの斡旋で低価格になっている。
車椅子を利用できるようになったので、母親自身の負担が大きく軽減されると喜んでいた。家のある場所は周りがモスリムで比較的裕福な家が多い。当人の家自体は小さいが、環境としては良い。

山の斜面を登り、敷地がトタンと木で仕切られた
中に自宅がある。デシエ市は山岳都市のため、平地が
少ないため、貧困層は山の斜面に自宅を持っている場合が多い。

子どもはメサッド・モハメッド（4歳、男児)。妹がいる。母親と、教員の父親がいる。当日は離れて暮らす母方の祖母が来ていた。インタビュー中に母親が涙を見せることがあって、祖母が元気づけていて印象深かった。車椅子のおかげで母親にゆとりが生まれていると喜んでいた。収入は1,500ブル。障害児への差別はあまり感じていないとのこと。

4,000 メートル弱の標高をもつ山裾に自宅がある。かまどは屋外にあり共同使用している。かなり貧しい暮らしぶりの様子であった。

レハナ・モハメッド（13 才、女児）　父親は日雇いの仕事をしている。母親も家事手伝いで仕事をしている。この日は水汲みに出かけていて不在だった。兄弟は他に 4 人いるとのこと。収入は両親合わせて 550 ブル。家は政府からの借用で 12 ブル／月の家賃。家のある場所は山の崖にある急峻な場所で、決してよい環境ではない。安い家賃でここに引っ越してきている。家の外も狭く車椅子で移動できる環境ではないが、外に出て喜んでいて「今回の車椅子はとても大切なもの」と父親が感謝している。

シラムラク・サヘル（７才、男児）　妹がいる。教員の父親と主婦の母親と暮らす。収入が 2,500 ブル。民間の貸家を 500 ブル／月で借りている。水が豊富にある地域で家の前には他では見ることが無かった畑があった。
車椅子を使用するのは初めてであり、母親の負担軽減と子どもを清潔に保つことにも役立っている。(訪問したすべての家には床上げが無く土間に直接マットレスなどを置いている)
自分は子どもを同等に扱うが、近所の人からは憐れみを感じている。車椅子は無くてはならないものと感謝している。

センター内の workshop（補装具製作施設）

補装具を製作する施設の案内をする専門家：
Mr. Mamo Ashebir
ポジション：
The Dessie prosthetic Orthotic Centre's
technical work coordinator

この施設では、当会が送った車椅子の修理なども
引き受ける話がある。

一人一人に合わせた補装具を製作するために必要な機器がすべてそろっている。
最下段右の写真は過去歴史的な補装具を展示している。
プログラムマネージャーの Maru 氏は、家庭訪問時に、子どもの家の近所に足の不自由な大人が家の前にじっと佇んでいるのを見て、この施設を訪問するように指導をしていた。

チェシャ財団の様子

写真左はチェシャのデシエ支部が借りている事務所

事務所内にある活動を紹介する写真

幹部から活動の様子の説明を受ける

まとめのミーティング中

今回の活動に関する契約書の取り交わし

右手前の男性がデシエのローカルスタッフ

チェシャ本部の様子

チェシャ財団本部前で記念撮影

プログラムマネージャーMaru 氏のオフィス

これまで同敷地内に存在した整備工房は 20 ㎞離れたアジスアベバ市内に移転していた。本部はオフィスのみとなっている。本部がある建物以外の棟はレンタルしていて、その収入を活動に充てている。
（最終日の本部訪問は、同財団は土曜日で休日にも関わらず案内をしてくれた）

ミーティングの主な内容は、下記の通り

１．プロジェクトの継続
　お互いが可能な限りの工夫と努力をすることで次回の贈呈も実現したい。

２．パラリンピックへの挑戦
　これから東京オリンピック・パラリンピックにエチオピア代表選手を１人だすことを目標にこれから双方が活動する。

３．今回の費用負担
　車椅子の国内輸送費・保管料や各家庭への配布の費用について予想以上にかかったので、その負担要望があった。可能であれば当方ＮＰＯに負担して欲しい。

以上

感想：

・車椅子を利用することで、母親の負担を大きく軽減することができると大変喜んでいたのが印象深かった。
・車椅子は手に入ったもののそれ以外のサポート（学校や、ソーシャルワーカー等）はない。が、親に暗さはなく明るく頑張っている姿に触れることができたのは喜びだった。
・エチオピアは最貧国の一つと聞いていた。確かに地方都市や山間部は貧しくホテルでも電気が止まったが国全体の経済成長率 10%以上が示す通り、実際にアジスアベバの発展ぶりは勢いがあった。

・今回のパートナーであるチェシャ財団は組織力があり、どの人も誠意をもってきびきびと行動している点が印象深かった。
・次回も車椅子提供を希望すると言われたので、何台くらいかと聞くと、それは実態を調査してから要望を出すと言われた。責任ある要望を出そうとしていることに感銘を受けた。

参考：式典の次第

No.	activity	time	Responsible body	Remark
1.	Invitees will take their seats	8:30 – 9:00	CF-AI Dessie Office	
2.	Introduction of the program to participants	9:00 – 9:10	CF-AI's Prog. Manager (Mr. Maru)	
3.	Welcoming speech by the CF-AI' Executive Director	9:10 – 9:20	CF-AI' EX. Director (Mr. Kedir)	
4.	Seeing the displayed wheelchairs of Pw	9:20 –9:40		
5.	Speech by a delegate from the volunteers group to send wheelchairs to overseas children in Japan	9:40 – 10:00	Delegate from Japan overseas (Mr. Morita)	
6.	Presentation by a delegate from the volunteers group to send wheelchairs to overseas children in Japan	10:00 – 10:30	Delegate from Japan overseas (Mr. Kuwayama)	
7.	Speech by the honourable guest from the Embassy of Japan in Ethiopia	10:30 – 10:40	Delegate from the Embassy of Japan (Mr. Yamada)	
8.	Speech by the honourable guest from the City administration Office.	10:30 – 10:40	Delegate from the City administration Office. Mr.Wondante Demissie	
9.	Handing over the wheelchairs to target clients	10:40 – 11:30	By different participant guests	
10.	Closing.	11:30	CF-AI	